

## 書 評



奥野由紀子編著、小林明子・佐藤礼子・元田静・  
渡部倫子著

## 日本語教師のための CLIL（内容言語統合型学習）入門

凡人社、2018 年発行、168p.

ISBN : 978-4-89358-945-3

滝島 雅子

### 1. はじめに

本書は CLIL（クリル）の入門書である。CLIL とは Content and Language Integrated Learning の略で、日本語では「内容言語統合型学習」と呼ばれ、「特定の内容（教科やテーマ、トピック）を目標言語を通して学ぶことにより内容と言語の両方を身につけようという教育法」（p. 2）を指す。1990 年代半ばにヨーロッパの複言語・複文化主義から生まれ、CEFR（Common European Framework of Reference：ヨーロッパ言語共通参照枠）の普及と共に広がり、現在、ヨーロッパを中心に世界中で CLIL を用いた外国語の授業が展開されている。

しかし、CLIL の「内容と言語を統合する」という考え方は決して新しくはない。70 年代のカナダでのイメージングプログラム<sup>1</sup>や 80 年代のアメリカにおける外国語教授法である CBI（Content-Based Instruction：内容中心指導法）としても体系化され大きな成果を上げてきており、CLIL は、先行するこれらの教授法の影響を受けつつ発展してきた。

編者は、日本語教育の現場における様々な国の学生との触れ合いを通して、世界で起きる出来事に関心を持ち、どうすればよりよい社会や平和が実現できるのかを考える中で CLIL と出会い、その多くの授業実践の経験から「内容も言語も同時に高められること、学習者も教師も豊かな成長を得られること」（p. ii）を確信するに至った。本書は、その思いを多くの日本語教育に携わる人たちと共有することをねらいとして書かれている。CLIL に馴染みがない読者にも分かりやすいよう、基本理念から具体的な実践方法、評価法に至るまで、第二言語習得の広く豊富な理論も踏まえて詳細に示している。同時に、それぞれの筆者による具体的で実感を伴った授業報告は、日本語教育の枠を超え、教育の現場に携わる人々に「学ぶ」ということの意義を再確認させ、様々な示唆を与える内容となっている。

### 2. 本書の概要

本書は、以下の 5 章で構成されている。

- 第1章「CLILって？」(奥野由紀子)  
 第2章「4Cを意識したら、授業が変わる？」(小林明子)  
 第3章「CLILの授業をしてみよう」(佐藤礼子)  
 第4章「CLILで授業をやってみた！」(元田静)  
 第5章「CLIL授業を評価して振り返ろう」(渡部倫子)

第1章と第2章は、CLILの考え方の入門編である。CLIL誕生の背景や特徴、基本理念、教師の役割、コース計画や教材選びなどについて、基本となる考え方を示している。第3章と第4章では、実践編として、さらに具体的な授業プランの立て方や授業での活動例、実際にCLILの授業を行った実践報告などを紹介している。そして第5章は、CLILの評価の考え方やその具体的な評価法について解説する評価編となっている。各章とも、わかりやすい文章で豊富な具体例を引きながら、CLILへの取り組み方とその有効性を述べている。

さらに各章に設けられたコラムでは、CLILの実践の中で筆者たちが感じた疑問や悩みが率直に綴られており、初めてCLILに触れる読者の立場に立った解説が充実している点も入門書として評価できる。また、全編を通して登場する鳥のキャラクター「くりるん」は、読者と共に学ぶCLILの「入門者」として、素朴な疑問や気づきをイラストと平易なコメントで伝え、読者の理解と意欲を向上させる効果的な仕掛けとなっている。

## 2.1 CLIL 入門編 ～第1章・第2章～

第1章では、CLILの基本理念や誕生の背景、「4つのC(4C)」に代表される特徴を分かりやすく解説している。「4C」とはCLILの基本原則であり、Content(内容)、Communication(言語知識・言語使用)、Cognition(思考)、Community/Culture(協学・異文化理解)という4つの概念を指す。まずContent(内容)については、「学習動機が高まるような内容」(p. 9)を選び、「わかる」知識(宣言的知識)だけでなく、「できる」知識(手続的知識)も意識した学習が重視される。Communication(言語知識・言語使用)については、「3つの言語」(言語知識の学習: language of learning, 言語スキルの学習: language for learning, 学習を通じた言語使用: language through learning)を「授業設計の段階から計画的に取り込み、無理なくスパイラルな向上をめざす」(p. 11)ことが重要とされる。Cognition(思考)については、「学習者は、表面的な理解、低次思考力LOTS(Lower-Order Thinking Skills)から深い理解、高次思考力HOTS(Higher-Order Thinking Skills)へと思考力を伸ばしていく」(p. 12)という考えに基づき、「記憶→理解→受容・応用→分析→評価→創造」という思考のピラミッドを、学習者が「スキャフォールディング<sup>2</sup>を受けつつ、目標言語で達成していきながら、目標言語に対する自信や、やればできるという自己効力感を高めて」(p. 13)いくことをめざす。最後に、Community/Culture(協学・異文化理解)については、ペアワークやグループワークなどの協働学習を通して相互文化的能力(intercultural competence)<sup>3</sup>を高め、地球市民の一員として課題を解決していくことが重視される。以上4Cに代表されるCLILの基本原則には、「第二言語習得に効果的だとされているエッセンスが無理なく、そして惜しみなく注

がれて」(p. 19) おり、4C を意識することで、より CLIL 的な授業を行うことができるとしている。ただ、本書が「入門書」であることを考えると、筆者が、さまざまな教授法・教育法を取り入れた「まさにスマホのように、使い勝手がいい教授法」(p. 7) とする CLIL の優位性や、本書のコラム (p. 20) で多少触れてはいるが、CLIL と類似する CBI やタスクで学ぶ TBLT (Task-Based Language Teaching) などとの違いや位置づけについて、もう一步踏み込んだ主張や解説があれば、本書で CLIL を取り上げる意義がさらに明確になったのではないと思われる。

第 2 章では、CLIL の基本原理に基づいた授業を行うための最初の一步として、CLIL のコースをどのように計画するのかを、大学の中上級レベルの学習者を対象とした日本語コース (全 15 回、テーマ「若者の雇用と働きかた」) を取り上げ説明している。読者は、具体的なテーマに関する全 15 回の授業内容を通して、CLIL を導入する際にどのような点に留意すべきかを 4C それぞれについて知ることができる。また後半では、筆者らが取り組んでいる「貧困問題」をテーマとした教育実践を例に、CLIL の教材作成についても述べている。教師が独自に教材を作成する場合を想定して、言語素材の選び方や 4C を活性化させるためのスキュフォーリングの準備のしかたを中心に、教材をどのように授業に適したものにするかについて解説している。CLIL の 4C のうち特に重要なのが「Cognition (思考)」を高めるためのスキュフォーリングであり、「教師が自分の知識や考えを披露したり押し付けたりするのではなく、対話やヒントの提示などを通して、学習者が自分で気づきを得られるようサポートしていくこと」(p. 60) の大切さが述べられている。

## 2.2 CLIL 実践編 ～第 3 章・第 4 章～

第 3 章では、CLIL の授業を実際にどのように行うかについて、授業中に行う活動 (アクティビティ) を中心に紹介している。まず授業の基本的な流れに沿って、4C それぞれについて押さえておくべきポイントを示し、「CLIL 授業での活動例」(pp. 77-104) では、「相互ディクテーション<sup>4)</sup>」「ジグソーリーディング<sup>5)</sup>」「自分の単語帳を作る」「ゲストスピーカーを招く」など、授業で使える 9 つの活動例が紹介されている。それぞれの活動例ごとに、冒頭に「所要時間」「日本語レベル」「活用場面」「思考」「言語スキル」が表で示され、CLIL の授業を組み立てる上ですぐに役立つ、実践的な内容になっている。

第 4 章では、実際に国内大学の学部生の選択科目として、初中級から中級前半の学習者を対象に行われた CLIL の授業を詳しく紹介している。授業は、貧困や国際貢献に関する DVD 視聴、テキストの読解や発表を通して、大テーマの「いのち」を学ぶ内容になっており、12 回にわたる CLIL の授業の内容が具体的に報告されている。筆者が「この授業を終えて」(p. 119) で述べている、学習者によっては戸惑う場合もあるため、興味や学習スタイルに合わせて柔軟に対応する必要があることや、言語面の学習を補助する教材がもっと必要であることなどの指摘は、実際に授業を体験して得られた貴重な実感であり、今後の CLIL のあり方を考える上で、示唆に富んでいると言えよう。欲を言えば、授業を終えて、学習者にどのような変化があったのか、実践の体験者ならではの具体的な報告があれば、実践報告がさらに立体的に見えてきたのではないだろうか。

### 2.3 CLIL 評価編 ～第5章～

最後に第5章は、CLILの授業の評価に関する解説である。CLILでは、言語知識や言語使用だけでなく、内容、思考、協学・異文化理解の4Cを統合的に伸ばすことを目標とするため、評価についても、4Cを意識し、総合的に評価することが求められる。例えば、言語面はペーパーテスト、内容と思考についてはポスター発表とレポート、協学についてはポートフォリオ、というように複数の評価法を用いることで、より妥当性が高い評価が可能になるという。本章では、筆者たちがCLILの実践で用いた評価法の特徴と、実施する際の注意点が、CLILを開始する前から終了後まで、段階に応じて紹介されている。

### 3. 本書の意義と課題

編者は、日本語教育でCLILを行う意味について、「言語を通して平和な社会の実現に必要な汎用的能力<sup>6</sup>を育成する」(p. 5)ことをめざすという教育観と、「無視することのできない世界や日本、母国の課題や社会的テーマについて、知り、考え、議論し、日本語で発信すること」(p. 6)で日本語使用の真正性を高められるという実用性の2つを指摘する。そして、編者の以下のことは、多文化共生社会におけるCLILの可能性を暗示している。

日本語学習者は、国籍も専門も多様です。将来、世界各地、さまざまな分野で活躍する人材です。そのような学習者が、CLILの授業で学んだことをなんらかの形で役立てたり、実現したりしてくれるかもしれません。CLILを通して蒔いた種が世界のどこかでいろいろな花を咲かせてくれるかもしれない、そう思うと夢は果てしなく広がっていきます。(p. 34)

編者がここで「夢」として語っているように、CLILが最終的に目指しているのは、単に言語を習得することにとどまらず、その先にある「地球市民の育成」である。本書で紹介されている「学習者の振り返り」からも、「(国際協力について)考え方が変わった」「メディアの見方が変わった」「(貧困の問題について)私も何かできないかと思った」など(pp. 136-138)、学習者の、1人の市民としての成長や変化を読み取ることができ、日本語教育の新たな可能性と広がりを感じさせる。

在留外国人数が約280万人を超え<sup>7</sup>過去最高を記録する中、2019年6月には「日本語教育推進法」が施行され、また同年度からは入管法改正により多くの外国人労働者の受け入れが始まっている。こうした社会状況において、これまでの日本語教育の実践や第二言語習得の理論を生かして、多文化共生社会に対応できる日本語教育の実現が喫緊の課題となっている。日本語教育の現場では、これまでも、「年少者のための日本語教育、専門日本語教育や、アカデミック・ジャパニーズ、日本事情、ビジネス日本語や技術研修、看護、介護の日本語教育など、内容を重視した教育が実施されてきて」(p. 5)いる。「日本語を学ぶ」だけでなく、「日本語で学ぶ」ことの重要性が認識される中、CLILは、日本語の学習をさらに質の高いステージへと発展させるヒントを与えてくれる教育法として期待される。本書は、その扉を開く入門書として読者に多くの気づきを与え、日本語教育に携わる

人たちの意欲をさらにかき立てるきっかけを作ってくれるだろう。

最後に課題を挙げるとするなら、1 つには CLIL でたびたび指摘される、担当する教師の負担と専門性に対する不安の問題である。例えば「国際貢献」など専門的な事柄をテーマとして扱うにあたり、素材選びから授業の組み立て、総合的な評価に至るまで、よい授業を目指すには、教師の負担や不安が大きくなることは容易に想像できる。それでも CLIL を行う意義は、CLIL による学習効果はもちろんだが、本書でも繰り返し強調される「教師も共に成長できるという実感」によるところが大きいと思われる。教師自身も学習者とともに成長できる CLIL のあり方については、本書では編者がコラムで一部体験を述べているものの、具体的記述が少ない。これから CLIL で授業をしてみたいという入門者の背中をさらに押してくれるような教師の成長の記録を盛り込んだ、実践編の刊行を待ちたい。課題の 2 つめには、CLIL の効果の検証があげられる。すでに「目標言語学習に対する CLIL の効果については、ヨーロッパを中心として量的・質的データが蓄積されつつあるが、日本語学習に対する CLIL の効果についてはその一部が検証されているに過ぎない」(小林・奥野 2019: 37) とされる。今後、本書をきっかけに日本語教育への CLIL 導入が進み、効果の検証結果の蓄積を踏まえて、研究や教育上の議論が活発化することに期待したい。

## 注

- 1 カナダのモントリオールで行われた英語母語話者の小学生が算数や理科などの教科をフランス語で学ぶ取り組みを始まりとする。
- 2 「scaffolding : 足場かけ」(Wood et al. (1976))。
- 3 バイラムらが提唱した、グローバル化の中で異文化を理解するために必要な能力。詳しくは、細川ほか (2015) を参照のこと。
- 4 「ペアで交互に文章を読み上げて互いに書き取る」(p. 78) 活動。
- 5 ジグソーリーディングにはさまざまなやり方があるが、本書では、文章を印刷し、4, 5 カ所に切り分けたシートを用意し、文章の概要を再構成したり、文章を並び替えたりする活動を紹介している (pp. 81-83)。
- 6 「知識活用力、批判的思考力、問題解決力、革新創造力、意思疎通力、協調協働力、社会貢献力、国際感覚力」(池田ほか 2016, p. 15) を含む。
- 7 2019 年 6 月末現在で 282 万 9,416 人 (法務省調べ)。

## 参考文献

- 池田真・渡部良典・和泉伸一 (編) (2016) 『CLIL 内容言語統合型学習 上智大学外国語教育の新たな挑戦 第3巻 ―授業と教材―』上智大学出版
- 小林明子・奥野由紀子 (2019) 「内容言語統合型学習 (CLIL) の実践と効果―日本語教育への導入と課題―」『第二言語としての日本語の習得研究』22, pp. 29-43
- 細川英雄 (監修)・山田悦子・古村由美子 (訳) (2015) 『相互文化的能力を育む外国語教育―グローバル時代の市民性形成をめざして―』大修館、Byram, M. (2008) From foreign language education to education for intercultural citizenship: Essays and reflections. Clevedon, UK: Multilingual Matters.
- Wood, D.J., Bruner, J.S., & Ross, G. (1976) The role of tutoring in problem solving. Journal of Child Psychiatry & Psychology 17(2), pp. 89-100

(たきしま まさこ 早稲田大学大学院日本語教育研究科・博士課程)